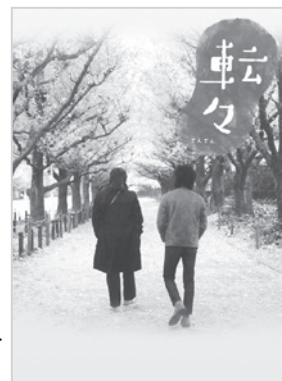


### 『転々』

2007年／日本／三木聡監督作品

### 東京散歩

会員 小佐々 奨 (68期)



【転々】  
DVD：4,700円＋税  
発売元：NBCユニバーサル・エンターテイメント  
※2020年4月の情報です。

私は散歩が好きだ。それも東京散歩。電車が止まったわけでもないのに霞が関の裁判所から当時暮らしていた高円寺まで歩いて帰ったこともある。少し歩くだけでガラッと雰囲気が変わっていく東京は、ただ通り過ぎるだけでも面白い。誰かと一緒ならもっと面白い。散歩目線だからこそ発見できる人や物をきっかけにして、普段は話さないようなことで話が弾むこともある。そんな東京散歩好きになったきっかけこそ、映画『転々』である。

借金を抱えた大学8年生の主人公文哉が、借金取りの福原に、100万円の謝礼と引き換えに東京散歩に付き合うよう誘われる。他に借金を返すあてもない文哉は、胡散臭い思いながらもその誘いを受けることにし、奇妙な二人の散歩が始まる。

本作は、ロードムービーのカテゴリとして紹介されることが多いが、旅によくある疾走感や壮大さの類は一切なく、オダギリジョー演じる文哉と三浦友和演じる福原が、絶妙なテンポの掛け合いをしながら東京の街をゆるゆると歩いていく。吉祥寺の井の頭公園から霞が関の警視庁まで。“旅”というよりは、まさに“散歩”である。

井の頭公園に始まり、調布飛行場、阿佐ヶ谷、新宿中央公園と、すぐにどこだか分かるところを歩いてみたかと思うと、商店街や住宅街、柿の実のなる狭い路地といったどこだか分からないところを歩いてみたり。「東京の街は風景が変化に富んでるから散歩向きなんだ」という福原の台詞のとおり、次々に変化する東京の風景を見ることができる。

また時の変化も感じさせられる。「今東京の思い出の半分はコインパーキングになってる」これも福原の台詞であるが、街の近代化や再開発によって失われてしまった東京の風景に思いを馳せてしまう。

しかし、本作がノスタルジックな感情に浸る寂しい映画で終わらないのは、テレビドラマ『時効警察』でも脚本を務めた三木聡監督のシュールで謎、それでいてゆるりとした独特な世界観が広がっているからだ。

たとえば、「街で岸部一徳を見るといいことがある」という設定があり、岸部一徳本人が岸部一徳として作中何度も出演しているなど、クスッと笑える小ネタがいたるところにちりばめられている。

また、本作後半では、小泉今日子演じる場末のバーのママである麻紀子や吉高由里子演じる麻紀子の姪ふふみを巻き込むホームドラマに突入するのだが、実は文哉たちとは全く血の繋がりのない疑似家族なのだ。それが、かなり強引な設定とは裏腹に実に“家族らしい”。みんなで食卓を囲むシーンは、少し切なくもあり、それでいてじんわりと温かい。そこには、変わらないものにふれたときの郷愁をとまなう安心感がある。

どこか寂しさ漂う秋の東京を舞台に、街のめまぐるしい変化と対照的に描かれる、いつまでも変わらない人の温かさにふれたときの安心感こそ、本作の魅力である。

もしこの映画を観る機会があれば、その後、大切な人と一緒に何気ない会話をしながらゆるゆると東京を散歩してみたい。思い出の場所はコインパーキングになっているかもしれないが、その代わり何か大切なものを見つけることができるかもしれないから。